

みず

No.40
道彩展機関紙

道彩展機関紙“みず”第40号
発行 北海道水彩画会
道彩会代表 小堀 清純
札幌市西区発寒5条8丁目
13-24-1101号
年1回発行



<http://www.ne.jp/asahi/so-bi/net/dousai>

第43回

道彩展を終えて

2024年9月18日

9月23日

札幌市民ギャラリー

初出品者の作品に注目

道彩会代表 小堀 清純

第43回道彩展は一三〇点の作品が搬入され厳選された一〇二点が展示され、また、入場者数は一千人を超え無事に幕を閉じました。審査は率直な意見を交わす中、慎重に実施されました。

総評として全体的にレベルが向上しており、個性豊かな作品が増え具象・抽象を問わず多様な表現の作品が集まり充実した展覧会となり好評でした。特に今回は初出品ながら完成度の高い作品が少なからず見られ感激しました。作品の大きさは高齢化が進む中で自らの目的や力量、体力にあった最適なサイズ（但し一〇号以上）に見直すのも良いと思います。

出品者を増やすため各人が水彩仲間積極的に呼び掛けることが重要であると痛切に思います。最後にそれぞれが精進努力し、観る人に感動を与える絵を描くように頑張ります。

第43回道彩展受賞者

道彩展賞

阿原 英実（札幌）

北海道知事賞

竹本 修（札幌）

札幌市長賞

田中 孝昌（当別）

札幌市教育長賞

三尾 画子（函館）

北海道新聞社賞

井上 啓一（札幌）

八木賞

若杉 博文（札幌）

伸子賞

浅野 俊紀（札幌）

奨励賞

金澤 逸子（倶知安）

齊藤 利朗（札幌）

澤田 和子（室蘭）

藤枝 和政（北斗）

吉川 まさ（北斗）

会員推奨

伊林 昌子（江別）

表谷美智子（江別）

丹保恵利子（江別）

若杉 博文（札幌）

会友推奨

田中 孝昌（当別）

現代水彩画の

新展開を観た

詩人・美術評論家

柴橋 伴夫

1982年に同人展でスタート。今回は43回展。長い歩みの中で大きくこの会が成長していることを個々の作品から感受した。

はじめに受賞作品について評したい。道彩展賞の阿原英実「帰路」は冬の日を暗調で統一しつつ中央上部の「塔」の部分に光をあてて静かな時間を表現。北海道知事賞の竹本修「木組みの家」は遠近の構図が安定。色調をグレーでまとめ、筆致がすぐれていた。佳品である。札幌市長賞・会友推奨の田中孝昌「た いせつなもの sophia」は水辺で語り合う少女とネコをやさしいまなざしでとらえている。デッサンが安定し、親和力に富む。札幌市教育長賞の三尾画子「春を待つ」は木立と地表の雪だけを的確に描き出している。北海道新聞社賞の井上啓一「トッカリの海」は巨石を左前



「帰路」阿原 英実



「た いせつなもの sophia」
田中 孝昌

面に置きどっしりとした情景づくりにチャレンジ。ただ構図づくりは一工夫必要か。伸子賞の浅野俊紀「触ると爆発ガマの穂」は小品なので残念ながらガマの穂と牧草ロールとの対比が十分に生かされていないのが惜しい。奨励賞の金澤逸子「ミャンマーの白い朝」は牛とバックの風景がとても丁寧に表現されており、描写力がすぐれていた。同じく奨励賞の齊藤利朗「厳冬の頃」はピンと張りつめた空気感がよくとらえられていた。木立の影が少し強かったようだ。奨励賞の澤田和子「旅の途中で」は狭い空間の中でよくまとめている。難をいえばもう少し大きな空間でみたかった。奨励賞の藤枝和政「橋の下」はなにより「橋の下」から見上げる視座をもちこむことでダイナミックな絵になっている。墨色を用いることで独自な味わいをつくり出している。たしかに眼の力を感じた。奨励賞の吉川まさ「夏の楽しい思い出」は二人の子供の楽しい表情が心をなごませてくれた。衣服の色合せも味わい深い。八木賞・会員推奨の若杉博文「秋水の流れ」は



「触れると爆発ガマの穂」
浅野 俊紀

川面の流動感と岸辺の木の枝と葉が絶妙にいいバランスを保っていた。色の使い方も的確で生氣あり。

続いて会員推挙の作品をみてみる。伊林昌子「野原2」は、前面の野の花が大きな半円を形成し、上部の野と空をより縮図することでもっともいい効果をつくり出していた。表谷美智子の「春の公園」は小品ながら水彩画の魅力を存分にみせてくれた。色が明るく快活である。白樺の白と緑が美しい調べを奏でていた。丹保恵利子の「雪景色」はまとめてゆくにはなかなか難しい風景にチャレンジ。雪が光によって変化することを丁寧に描出しようとしていた。



「木組みの家」竹本 修

紙幅が限られてきた。可能な限り私の眼に映った佳品を列挙しておきたい。佐良土敏子の作品は青の詩情が湧出。中田やよひの作品はコラージュを用いつつ色のトーンを押え構図づくりが新鮮だった。小堀清純の「錆びた扉」は小樽運河の倉庫を直截に表現。重厚な色調がすぎ去った時間をとらえていた。高橋智子の作品は、ストロークが動勢を発し色彩（赤と黒）の対比も妙あり。勇内山和子は自在な筆跡を発揮。糸塚章子はピンクを主調音としリズムもあり。伊東幹子の作品は火花を抽象化した色の供宴を創出。林田理栄子のパリの情景は詩情あり。一般では村井美智代、中川弘美、松井友里、窪田美代子らに新しい可能性を強く感じた。



「野原2」伊林 昌子

受賞者の声

阿原 英美

私は油彩を描いていましたが、水彩に替えても油彩の描き方を基に、キャンパスに地塗りを塗ることによって、水で濡

らした所をティッシュで拭き取りしくり返し描けます。

光と奥行きを常に考え描き進めています。きれいな絵ではありませんが、どうしてもきれいな水を使うことができないのが原因だと思っています。逆に水彩でも油彩のように見えるのが特徴で少しですが重厚になります。絵を見て何かわからないが、不思議な魅力があり、少しでも何らかの感動をあたえられればと一生懸命描いています。

井上 啓一

第43回展に出品しました「トッカリの海」の受賞は、私にとって望外の喜びです。この作品は、アートツアーズのスケッチパスに参加して、室蘭のトッカリッシュを訪れた時の第一印象「強い海風と一枚岩の岸壁」に目を奪われた感動を絵にしました。この感動が皆様に伝われば嬉しく思います。

終わりに、私の教室の先生のご指導と、初めての40号作成に背中を押して下さった仲間へ感謝です。



「トッカリの海」
井上 啓一

金澤 逸子

この作品は、二〇一八年にミャンマーを旅した時の風景を描いたものです。夜露に濡れた

木々を見ながらジョギングしていると向こうから牛が引く荷車がカカカタと音をたててやってきました。赤い角飾りをした牛の白い体はゆっくり左右に揺れ、農夫の操るままに角を曲がって行ったのです。ゆったりとした時の流れを私はただ懐古的な気持ちで眺めていました。その後コロナやクーデターといった社会情勢の変化でミャンマーに行くことは困難になりましたが、信心深く温厚な人たちが暮らすあの場所が、今も変わらないままであってほしいという願いを込めて制作しました。



「ミャンマーの白い朝」
金澤 逸子

第44回道彩展 作品公募

- 会期 2025年9月17日（水）～
9月21日（日）
- 会場 札幌市民ギャラリー
- 搬入 2025年9月13日（土）
10：00～18：00

<http://www.ne.jp/asahi/so-bi/net/dousai>

'25 行事計画

第2回みず展

2月18日（火）～2月23日（日）
ギャラリー大通美術館

研究会 内容未定

第44回道彩展

9月17日（水）～21日（日）
搬入：9月13日（土）

札幌市民ギャラリー

道彩会地区展 函館展 未定

江別展 未定

道彩展に関する お問い合わせ

道彩会事務局

札幌市東区本町1条6丁目7-11
（011）782-5781

▼函館地区連絡所 大山 栄子
北斗市七重浜8-21-3
090-6692-2831

▼江別地区連絡所 中島 恭代
江別市野幌若葉町46-31
（011）385-4217

編集後記

今年は急に暑くなったりまた寒くなったり、季節の境があいまいでした。物の値段が上がって、絵を描くのにちょっとした経費のかさむ年でもありましたね。本展も43回を迎え、多数の出品者や来場者に支えられ無事終えることができました。絵を描くことはたくさんの喜びと苦勞と活力をもたらす得難いものです。来年に向けて一緒にまたがんばりましょう。 若杉・渡辺